「イサクとリベカの結婚」（創世記二四章一～六七節）

1　晩年

アブラハムの生涯を辿る私どもの学びも、終わりに近づいています。今日は最晩年のアブラハムのことです。一人息子イサクが妻を迎えるということですから、アブラハムにとっても非常に重要な、祝福に満ちた出来事、それが創世記のアブラハム物語の最後を飾ることとなります。

この長い物語、一つの短篇小説と呼ばれてもよいと言った人がいます（フォン・ラート）。なるほど、たしかにそうした趣があります。登場人物は、その生い立ちから性格まで、詳しく書かれているわけではありません。人間の生活の一コマが切り取られ語られています。

話は、一人の人の結婚という話です。その意味で私どもにも身近な出来事です。読む人、聞く人、だれにも余韻が残ります。それはやがて消えるとしても、何かしら人生の、人間の真実に触れたという感覚は消えない。それは私ども自身を、知らぬ間に豊かにするものです。

この長い物語、改めて読んで気になった言葉が二つあります。二つともアブラハムの言葉として出てくるのですが、一つは「天の神、地の神である主」（三節）。もう一つは、七節の「その方がお前の行く手に御使いを遣わして・・・」という言葉、言い回しです。

はじめの「天の神、地の神である主」。ご承知のように聖書では、天地、あるいは天と地という言葉が多く使われます。天地、あるいは天と地で、一般にはこの世界全体を表します。

ところがここでは、天地の神ではなく、わざわざ、天の神、地の神となっているのです。なるほど神は天の神です。しかしこの方は地の神でもあります。この地で、ここで、私どもの間で、いま働いておられる神、共におられる神。今日の聖書箇所は神が共にいますことを証ししています。

もう一つ、「その方がお前の行く手に御使いを遣わして・・・」（口語訳、主は、み使いをあなたの前につかわされるであろう）。この言葉も、最初読んですぐ心に残った言葉、言い回しです。

改めて思い起こせば、「御使い」がアブラハム物語で、はじめから大きな役割を果たしていたのです。

真っ先に思い出すのは、神ご自身が二人の御使いと共にアブラハムに現れ、イサク誕生を予告する、さらにソドムを滅ぼし、しかしその中からアブラハムの甥ロトを救い出した場面です。もっと劇的な場面では、アブラハムがイサクを燔祭のために屠ろうとしたとき、「その子に手を下すな。何もしてはならない」と言ってそれを止めたのも御使いでした。

今日の箇所でアブラハムは、神は御使いをあなたの前に、あなたに先立って遣わしてくださる、イサクに妻を迎えることができるようにしてくださると言って、僕を送り出します。

ただ今日の箇所全体を見ても御使いがこの僕に直接現れて指示したことに触れてい

るところはないようです。しかしつねにこの僕と共に、彼に先んじて働いていたということでしょうか。何か劇的なことがこの章で語られているわけではありません。奇跡があるわけでもありません。あえて言えば、語られているのは神の摂理です。穏やかな、静かな物語、しかしつねに神が御使いと共に働き、導いてくださっていたことを忘れてはならないのです。

2　リベカ、イサクのもとに

さて長い長い物語、ストーリー全体を簡単に申し上げれば、アブラハムがイサクの嫁探しに僕を遣わします。僕はそれに首尾良く成功し、リベカを連れてくる。イサクとは初対面でしたが、イサクはすぐ好きになった。こうして神の祝福の約束がアブラハムからイサクへと引き継がれ、やがてその子ヤコブによる神の民イスラエルの本格的な歩みへとつながって行きます。

物語としては単純です。場面は、しかし四つに区分できるように思います。それぞれ確認して、全体をつかんでいただき、その上で、いくつかのことを申し上げたいと思います。

さて四つの場面と言いました。**最初は**アブラハムが、イサクの嫁を探すために、僕を遣わすところです（一～一〇節）。

遣わされた僕は「家の全財産を任せている年寄りの僕」（二節）とあって、名前はありませんが、じつはエリエゼルのことです。覚えていらっしゃるでしょうか（一五・二）。アブラハムは前に、子供ができないとき、一時彼を養子にして、後を継がせようとしたことがありました。

遣わされた先は、アブラハムの故郷です。カナンに来る前彼はメソポタミアのハランに住んでいました。その付近です。アブラハムはカナンの娘を嫁にすることを許さなかったのです。異教徒との結婚を許さなかった。それだけではありません。イサクを向こうにやってもならないのです。エリエゼルの問いに、アブラハムはこう答えています。

> アブラハムは答えた。「決して、息子をあちらへ行かせてはならない。天の神である主は、わたしを父の家、生まれ故郷から連れ出し、『あなたの子孫にこの土地を与える』と言って、わたしに誓い、約束してくださった。その方がお前の行く手に御使いを遣わして、そこから息子に嫁を連れてくることができるようにしてくださる」（六～七節）。

これによれば、アブラハムは、この土地をあなたの子孫に与えるという神の約束を何よりも重んじたということです。神の約束です。神は必ずそれをこの場合も果たしてくださるはずです。

二番目は、アブラハムの僕エリエゼルがリベカを見いだす場面です（一一～二七節）。アブラハムがどこに住んでいたか、カナンの南部であることは間違いありません。そこから、メソポタミヤの目的地（ナホルの町）まで二〇日近くかかる道のり、何人かの従者とらくだ十頭で出かけます。

町に着いて町外れの井戸の傍らで、らくだを休ませ、エリエゼルは祈ります。イサクの妻の候補になる女性と出会わさせてくださいと。彼は、夕方、町の女性たちが水くみに来る、その時、「水がめを傾けて」水を飲ませてくださいとお願いし、お飲みください、らくだにも飲ませてあげましょうと、だれか女性の一人が言ったら、その女性を、イサクの嫁と決めさせてもらいますというわけです。ですから、とても優しい、動物にも優しい、よく気がつく女性ということになるでしょうか、こちらの条件を設定し、それでいいですね、神の御心としますよ、というわけです。私どもも似たようなことをやります。

エリエゼルがまだ祈り終わらないうちに、祈った通りの女性が現れます。彼女は水がめをおろし「手に抱え」彼に飲ませ、らくだにも飲ませてやるといって、水をくみに井戸に走って行きます。彼女はエリエゼルの設定をはるかに越える人でした。優しいだけではない、際だって美しく（一六節）。決断にも富む女性でした（五八節）。しかも彼女は、アブラハムの弟ナホルとその妻ミルカ（彼女はナホルの弟の娘）の子ベトエルの娘だというのです。ですから、リベカにとってアブラハムは大伯父ということになります。何もかも、主人アブラハムから命じられたことを満たしてくれる女性に違いないのです。

この人だと思ったエリエゼルは、リベカに金の鼻輪と腕輪二つを贈ります。家にも案内されて、兄ラバンから歓迎されます。リベカの母はまだ生きていますが、父ベトエルは、この時には亡くなっていたという説もあります。ラバンが家を代表してエリエゼルを接待し、交渉しています。このラバンの家でのエリエゼルのことが、**第三の場面**です（二八～六一節）。

エリエゼルは、食事にも手をつけず、彼の主人アブラハムのこと、ここに来た自分の旅の目的、そしてついさっき井戸のそばでのお嬢さん（リベカ）との出会いのことなど、すべて話します。その上で、ラバンの答えを待ちます。ラバンは次のように言います（ベトエルの名も、ラバンの後に上げられています）。

> ラバンとベトエルは答えた。「このことは主の御意志ですから、わたしどもが善し悪しを申すことはできません。リベカはここにおります。どうぞお連れください。主がお決めになったとおり、ご主人のご子息の妻になさってください」（五〇～五一節）。

ラバンはここで「主の御意志」「主がお決めになったとおり」といっています。彼らもアブラハムと同じ主なる神信仰に入っているということが前提で語られている言葉です。

リベカの嫁入りは兄ラバンが認めたことで決まったわけですが、リベカ自身の思いも確認されています。彼女は、エリエゼルとすぐに出発することに、「はい、参ります」と言って同意します。優しいだけでなく、美しいだけでなく、先に述べたようにはっきり自分の気持ちを表す人であることを伺わせます。

3　御使いをあなたの前に

さて最後、**四番目の**場面です（六二～六七節）。リベカは、エリエゼルと共に、カナンの地へ、その南部、ネゲブ地方の、イサクのいるところに向かいます。はじめてイサクと出会う、それが最後の場面です。

イサクはネゲブ地方に住んでいた。そのころ、ベエル・ラハイ・ロイから返ったところであった。夕方暗くなるころ、野原を散策していた。目を上げて眺めるとらくだがやって来るのが見えた。リベカも目を上げて眺め、イサクを見た。リベカはらくだから下り、「野原を歩いて、わたしたちを迎えに来るあの人は誰ですか」と僕に尋ねた。「あの方がわたしの主人です」と僕が答えると、リベカはベールを取り出してかぶった。僕は、自分がなし遂げたことをすべて裂くに報告した。イサクは母サラの天幕に彼女を案内した。彼はリベカを迎えて妻とした。イサクは、リベカを愛して、亡くなった母に代わる慰めを得た（六二～六七節）。

この時イサクの年齢は四十歳でした（二五・一九）。母を亡くして三年。母サラがイサクの行く末を案じながら亡くなったであろうことは想像がつきます。母の死は彼にかなりこたえていたのです。

リベカがやって来たとき、イサクは「夕方暗くなるころ、野原を散策していた」と書いてあります。「散策していた」というところは、思いをめぐらすというのがもとの意味です。英語は多く「瞑想する」という言葉を当てています。「祈るために野原に出て行った」とルター訳しています。まさに彼は一人祈るほかなかったのです。そうしたイサクにとって、リベカは、どれほど深い「慰め」となったのでしょうか。この一事をもってしても、二人の結婚は、神の恵みに満ちていたものと見ることが出来るように思います。

このことは、晩年のアブラハムにとっても、大きな祝福でした。祈りは聞かれたのです。何より彼が心に願っていた、神の祝福の約束のかなうことが、目の前に示されたからです。

アブラハムの生涯は、これまで見てきたように人一倍試練に満ちたものでした。しかし晩年にいたって、神は、「何事においてもアブラハムに祝福をお与えになったのです」（一節）。「何事においても」、神の思うところと、アブラハムの願い、祈るところと一致したということです。

はじめに私は、今日の箇所で、「地の神」という言葉と、「主は、み使いをあなたの前につかわされるであろう」（口語訳）に注目しました。アブラハム、そしてその意を体して働いたエリエゼル、彼らの前に、彼らに先立って主は御使いをつかわされたのです。しかし先に申しように、御使いは、物語に直接は出てきません。隠れているといわざるをえません。新約聖書をへた状況でいえば、ここで「御使い」と言われるのは、イエスの代わりに世に遣わされた聖霊と受け取ってもよいように思います。神は私どもに聖霊をくださっている、私どもの日常の中で、変わり映えもしない日々ですけれど、御霊が私どもと共にいて、教え、導き、助け、慰め、弁護し、執り成してくださる、そのことを、私どもは思わないわけにはいかないのです。

（二〇二〇・一一・八）